

専門学校ひきこもり・不登校に関する探索的研究

須田 誠・野中 俊介・藤後 悦子

An Exploratory Research of Hikikomori and Often Absent from Vocational School

Makoto Suda, Shunsuke Nonaka and Etsuko Togo

要 旨

本研究の目的は、専門学校の教職員がひきこもり・不登校の生徒に対して抱く考えや、対応する方法とその対応における困り感を探索的に検討することであった。医療・福祉・調理系専門学校に勤務する教職員 133 名（女性 89 名、男性 44 名）に対し、教職員の属性、ひきこもり・不登校生徒の属性、教職員のひきこもり・不登校の生徒への考え方や対応、専門学校特有の教職員の困りごと等を質問した。分析の結果、教職員が認識するひきこもり・不登校の主な理由は、「友人関係」、「精神障害や精神疾患」、「いじめ」、「家族関係」であった。また、ひきこもり・不登校における専門学校特有の困りごとに関する自由回答を KJ 法で分類した。本研究の結果、資格取得や就職という専門学校の教育目標がある一方で、基本的な学びのレディネスが形成されていない生徒、精神的な問題や家族の問題を持つ生徒への対応に教職員は困り感をもつ可能性が示された。

キーワード：専門学校、ひきこもり、不登校、教職員、困り感

1. 問題

「せめて高校ぐらいは出て欲しい」。これは、ひきこもり・不登校の当事者の支援の際に、当事者の親からよく聞く言葉である。それが今や「せめて大学ぐらいは出て欲しい」に変わってきている。

文部科学省（2020b）によると、2020 年度の高校の不登校の生徒数は 43,051 人で、1,000 人当たりの不登校生徒数は、13.9 人に及び、決して少ないとは言えない。高校の不登校は中途退学に繋がりがやすすい。高校の中途退学者は 34,965 人で 1.1% に及び、高校生の 100 人に 1 人が中途退学をしている。こうした中途退学者は、その後どこへ行くのであろうか。

高学歴化の中で多様な学びの機会を設けている

場の一つが「高校通信制課程（以下、通信制高校とする）」であり、全日制高校の中途退学者の進学先と考えられる。文部科学省（2020a）によると、通信制高校の生徒数が近年大きく増加しており、全ての高校在籍者数のうちの 5.9% を占めている。また、在籍生徒の実態としては、小・中学校及び前籍校における不登校経験がある生徒が 66.7% を占めている。実際、三菱総合研究所（2012）によると、通信制高校の在籍者は中学校までの不登校経験のある生徒が圧倒的に多く、不登校経験のない生徒が 2 割以下と回答した通信制高校は僅か 12% であった。通信制高校の生徒 2,424 名から回答を得た平部他（2021）の調査でも不登校経験者は 46.4% となっており、小・中学校での不登校経験者や全日制高校の中途退学者の受け皿になっている

実情が浮かびあがる。

そして、通信制高校の卒業後の状況は、大学等進学者が18.0%、専門学校進学者が21.7%、就職者が19.6%である（文部科学省、2020a）。つまり、通信制高校卒業者の多くが専門学校に進学している。内田・片山・都島・尾川（2018）も、“定時制・通信制高校では卒業後の進路について、専門学校が四年制大学や短期大学（以下、短大とする）等よりも選択されやすい傾向にある”と考察している。これらから、ひきこもり・不登校の当事者の一定数は「小・中学校不登校→（全日制高校中途退学→）通信制高校卒業→専門学校」という進路を辿ると考えられる。ひきこもり・不登校の当事者の小・中・高校での就学状況の不安定さは、その先の高等教育に引き継がれる可能性がある。つまり、社会全体の高学歴化に伴い、大学・短大や専門学校におけるひきこもり・不登校の当事者は増加傾向にあると予想される。

このように、高学歴化の中で多様な学びの機会を設けている場の一つが専門学校であり、2020年度の専門学校進学率は24.0%と比較的高い水準となっている（文部科学省、2021）。大学・短大への進学が「特別ではない」という社会状況にあり、大学に進学するために必要な学力や経済力や意欲が届かない若者の進学需要は専門学校が担ってきた側面がある（近藤・岩永、1985）。つまり、専門学校への進学は大学進学の代替措置となっている可能性がある。

親からしてみれば、よその子どもの多くが大学に進学する中で、我が子に対して「せめて専門学校ぐらいは出て欲しい」という願いがあるのだろう。しかも、専門学校の本来の機能の「短期の修業年限で高度な知識とスキルを学ぶ」ことで、我が子が「手に職をつける」ための進学となるので、親としては「願ったり叶ったり」と言えるのかもしれない。

文部科学省（2005）の中央教育審議会は「我が国の高等教育の将来像（答申）」で、専門学校に“誰もがアクセスしやすい柔軟な高等教育システム

の構築”を求めている。これは、2015年から2020年までに想定される専門学校の将来像だったが、2020年を通り過ぎた現在、それは実現したであろうか。一つの事実として、高校卒業後もさらなる高等教育を望む時代になり、高度な選抜試験のない専門学校は“誰もがアクセスしやすい”ものとなったと言える。

また、宮西（2011）は、“戦後、二〇年間で高校進学率は二倍に、その後の二〇年間で、大学進学率も倍増”したと指摘し、さらに“この高学歴化の過程で日本固有の受験文化が形成され、高学歴が人生での成功や幸せ、つまり、経済的成功（お金持ち）を約束するとの強固な価値観”が日本社会に形成されたと論じている。さらに、この価値観を“妄想的とも言える確信”と断じ、“社会的ひきこもりとは、この硬直した価値観により若者が拘束され、身動きが取れなくなった状態である”とし、“ある社会、少なくともある集団が構築した妄想体系により創造された若者の病理現象である”と論じている。この“妄想的ともいえる確信”を抱いているのが、ひきこもり・不登校の親の一部なのかもしれない。

ひきこもり・不登校の支援に携わっていると、50歳代から80歳代の親は、まさに日本社会が高学歴化する過程を生きてきたため、親自身の学歴の内容に関わらず、高学歴に対する“妄想的とも言える確信”を抱いていることに気づかされることが多い。その結果が、本稿冒頭に掲げた「せめて高校・大学ぐらいは出て欲しい」という親の願望である。

こうした高等教育を巡る親の「思い」が、ひきこもり・不登校の若者の「生きづらさ」に結び付き、家族のコミュニケーションを悪化させることも考えられる。ひきこもり・不登校の要因は多種多様であるが、家族のコミュニケーションの問題を孕んでいることが圧倒的に多い。ひきこもり・不登校の当事者は、学校に居場所を見つけにくい。家族のコミュニケーションが悪化してしまえば、その生きづらさは増大するであろう。

専門学校生のひきこもり・不登校は増加傾向に

あると予想されるが、そうした生徒への支援に関する研究はあまり見当たらない。そこで、本研究では、専門学校の教職員を対象に、ひきこもり・不登校の生徒に対して何を考え、どのような対応をしているのか、そして、その対応においてどのような困り感を抱いているか等の実態調査を行い、専門学校のひきこもり・不登校の生徒に対する支援策の開発の第一歩とすることを目的とする。

尚、本研究における「ひきこもり」と「不登校」は厚生労働省や文部科学省による定義の通りではなく、本研究の協力者である専門学校の教職員の判断による「ひきこもり」と「不登校」である。

2. 方法

(1) 期間

2019年7・8月及び2020年7・8月である。

(2) 調査協力者

全国の医療・福祉・調理系専門学校の教職員133名（女性78名、男性55名）から回答を得た。2019年（80名）と2020年（53名）のどちらの自由記述の回答においても、新型コロナウイルス感染症の影響に触れられていなかったため、合計して検討することとした。協力者の平均年齢は31.44±7.38歳であり、勤務年数は1年以内が18名、2～5年が52名、6～10年が39名、11～15年が4名、16年以上が17名、不明が3名であった。また、協力者は担任が75名、管理職が13名、教員が30名、職員が14名、不明が1名であった。

(3) 調査方法

筆者らが講師を務める研修会の事前に、書面で研究の概要について説明し、Googleフォームを使用して匿名によるオンライン調査を実施した。

(4) 質問項目

協力者の属性を質問した後に、選択回答形式（複数回答可）及び自由記述形式で以下の11の質問をした。具体的な内容は「1. ひきこもり・不登校の

生徒の出身校はどれですか?」、 「2. あなたの学校に入学する前からひきこもり・不登校の経験のある生徒はいますか?」、 「3. ひきこもり・不登校の主な理由は何だと思えますか?」、 「4. ひきこもり・不登校の生徒の親の特徴はどのようなものですか?」、 「5. ひきこもり・不登校の生徒に対してどのように考えますか?」、 「6. ひきこもり・不登校の生徒への対応に自信がありますか?」、 「7. ひきこもり・不登校の対応で教職員として困っていることは何ですか?」、 「8. ひきこもり・不登校の支援として、少しでも効果があったことは何ですか?」、 「9. ひきこもり・不登校の支援で誰（機関）と連携をしましたか?」、 「10. ひきこもり・不登校の支援で、教職員として身につけたい知識は何ですか?」であった。最後に自由記述形式で「11. ひきこもり・不登校に関して専門学校特有の困っていることは何ですか?」と尋ねた。

(5) 分析方法

選択回答形式の質問の結果については、主要な質問項目について記述統計量を求めた。また、自由記述の内容を、情報集約的及び探索的に分析が可能であるKJ法（川喜田、1970）を実施した。カテゴリー化以降の手順は、公認心理師である研究者3名による合議の上で分類した。

(6) 倫理的配慮

本研究は、回答は任意であり、匿名性が確保されていること、学術的な利用のみ行うことを文書で説明し、同意を得た。尚、本研究は東京未来大学倫理委員会にて承認された（受付番号109番）。

2. 結果

(1) ひきこもり・不登校の生徒の出身校

ひきこもり・不登校の生徒の主な出身校は、「通信制高校」（74.44%）、「定時制高校」（42.11%）、「全日制高校（普通科）」（33.83%）であった。その他は「高卒認定試験」や「専門学校」等が挙げられた。

(2) 入学前からのひきこもり・不登校経験の有無
入学前におけるひきこもり・不登校経験は「多い」(25.96%)と「どちらとも言えない」(40.60%)を合わせると、約6.5割にのぼった。

(3) 教職員が考えるひきこもり・不登校の主な理由

ひきこもり・不登校の主な理由は (Table 1)、「友人関係」が約8割、続いて「精神障害や精神疾患」(76.69%)、「いじめ」(56.39%)、「家族関係」(53.38%)であった。「アルバイト」も約1割あった。

Table 1 ひきこもり・不登校の主な理由

	回答数 (件)	割合 (%)
友人関係	110	82.71
精神障害や精神疾患	102	76.69
いじめ	75	56.39
家族関係	71	53.38
生活リズム	51	38.35
学業不振	31	23.31
SNS	31	23.31
教職員との関係	26	19.55
進学の実敗	13	9.77
アルバイト	12	9.02
ゲーム	4	3.01

(4) ひきこもり・不登校の生徒の親の特徴

親の特徴は、「放っておく」(63.91%)、「過度に干渉する」(49.62%)、「叱咤激励する」(18.80%)という順であった。その他は、「本人の意向を優先する」、「親も精神的に不安定」、「対応なし」等であった。

(5) ひきこもり・不登校の生徒に対する考え方

ひきこもり・不登校の生徒に対する考え方は (Table 2)、「登校復帰させるような働きかけをしたい」、「専門家と連携して解決を図りたい」がそれぞれ約6~7割であった。その一方で、「教員は何もしてあげられない」は最も少なかった。

Table 2 ひきこもり・不登校の生徒に対する考え方

	回答数 (件)	割合 (%)
登校復帰させるような働きかけをしたい	95	71.43
専門家と連携して解決を図りたい	81	60.90
登校するしないは本人の意志なのでそっとしておきたい	28	21.05
親がもっと関わるべきだ	32	24.06
教員は何もしてあげられない	6	4.51

(6) ひきこもり・不登校の生徒への対応の自信

ひきこもり・不登校の生徒への対応の自信は、「あまりない」(19.55%)、「まったくない」(49.62%)が合わせて約7割にのぼった。「とてもある」は1名もいなかった。また、対応への自信と「勤務年数」及び「ひきこもり・不登校の生徒でかかわった人数」の関連を検討した結果、勤務年数 ($\chi(12) = 7.67, n.s.$)、かかわった人数ともに対応への自信 ($\chi(9) = 14.56, n.s.$) と有意な関連はみられなかった。

(7) ひきこもり・不登校の対応で困っていること

対応上で困っていることは (Table 3)、6割以上が「本人に会えない」、「退学してしまう」であった。その他は、「多忙な業務で対応に時間がかけられない」、「対応のフローチャートがない」等であった。

Table 3 ひきこもり・不登校の対応で困っていること

	回答数 (件)	割合 (%)
本人に会えない	89	66.92
退学してしまう	86	64.66
無力感	46	34.59
本人の親との話し合いがうまく進められない	37	27.82
不登校生徒のことを級友に説明できない	22	16.54
教職員間で意見の食い違いがある	13	9.77
その他	10	7.52

(8) ひきこもり・不登校の支援の効果

支援として効果があったことは (Table 4)、約 6 割が「本人の親との話し合い」、約 5 割が「本人との話し合い」、約 4 割が「級友からの働きかけ」と回答した。その他は「経験なし」等が挙げられた。

Table 4 ひきこもり・不登校の支援として効果があったと思うこと

	回答数 (件)	割合 (%)
本人の親との話し合い	85	63.91
本人との話し合い	73	54.89
級友からの働きかけ	58	43.61
生徒への電話	50	37.59
専門家からの働きかけ	32	24.06
本人への手紙やメール	40	30.08
その他	6	4.51
教職員会議	9	6.77
家庭訪問	2	1.50

(9) 連携先

支援における連携先は (Table 5)、「管理職」が最も多く、続いて「公認心理師や臨床心理士」であった。「保健所・保健センター」、「福祉施設」の回答はなく、約 1 割は「連携していない」と回答した。その他は「高校」や「親」等であった。

Table 5 支援における連携先

	回答数 (件)	割合 (%)
管理職	74	55.64
公認心理師や臨床心理士	20	15.04
連携していない	15	11.28
その他	18	13.53
病院	6	4.51
社会福祉士や精神保健福祉士	1	0.75
民生委員	1	0.75
保健所・保健センター	0	0.00
福祉施設	0	0.00

(10) 身につけたい知識

ひきこもり・不登校の支援に関して身につけたい知識は (Table 6)、約 7 割が「臨床心理学等の心理学」、約 6 割が「精神医学等の医学」であった。

Table 6 ひきこもり・不登校の支援に関して身につけたい知識

	回答数 (件)	割合 (%)
臨床心理学等の心理学	97	72.93
精神医学等の医学	81	60.90
児童福祉や障害者福祉等の福祉学	52	39.10
当事者の生活設計のための金銭的な知識	19	14.29
行政や法律	13	9.77
その他	2	1.50

(11) 専門学校特有の困っていること

専門学校特有のひきこもり・不登校に関して困っていることを KJ 法により【大カテゴリー】、[中カテゴリー]、<小カテゴリー>に分類した。そして、大カテゴリーと中カテゴリーの定義を示した (Table 7)。

大カテゴリー【当事者】からは、以下の中カテゴリーと小カテゴリーが析出された。それは、[当事者との関わり]、<当事者の主張>、<当事者の心身の特性>、<当事者の学びのレディネスの未形成>、[当事者の親との関わり]であった。大カテゴリー【専門学校】からは、以下の中カテゴリーが析出された。それは、[非義務教育]、[授業の特性]、[資格取得及び就職]、[他の生徒との兼ね合い]であった。大カテゴリー【教職員】からは、以下の中カテゴリーと小カテゴリーが析出された。それは、[多忙さ]、[分からなさ]、<距離感>、<知識・スキル>であった (Table 8)。

Table 7 教職員がひきこもり・不登校に関して困っていることの自由記述のKJ法による分類と定義

大カテゴリー	定義	中カテゴリー	定義
当事者	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の生徒の対応において困る、当事者の生徒とその親の特性	当事者との関わり	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の対応において困る、当事者の生徒の考え方や学びに対する構え等の特性
		当事者の親との関わり	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の対応において困る、当事者の生徒の親の考え方や家族関係
専門学校	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の対応において困る、専門学校の教育の特性	非義務教育	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の対応において困る、専門学校の非義務という教育の特性
		授業の特性	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の生徒の対応において困る、専門学校の実習の授業
		資格取得及び就職	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の対応において困る、専門学校の資格取得や就職という教育の目標
		他の生徒との兼ね合い	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の対応において困る、当事者の生徒と他の級友との対応における兼ね合い
教職員	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の対応において困る、教職員自身の他者との関りにおける困難さ	多忙さ	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の対応において困る、専門学校の教職員としての業務の遂行
		分からなさ	専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の対応において困る、当事者の生徒との対応における距離感や知識における分からなさ

Table 8 教職員が不登校・ひきこもりに関して困っていることの自由記述のKJ法による分類とエピソード

* () 内は各中カテゴリーないし各小カテゴリーの総エピソード数

大カテゴリー	中カテゴリー	少カテゴリー	代表的なエピソード
当事者	当事者との関わり (27)	当事者の主張 (4)	<ul style="list-style-type: none"> 自分で決めた進路なので、自分が決めたことと言われてしまうと何も言えなくなること。 出来上がった考え方なので、なかなかこちらの提案も受け入れてもらえない。 連絡が一切取れないこと。(その他、1)
		当事者の心身の特性 (16)	<ul style="list-style-type: none"> 集団で行う授業が多い為、人間関係作りが苦手な生徒が脱落しやすい。 グループでやらなければいけない、人前で話す機会が多いが苦手な学生が多い。 元々が内向的な性格である。 不器用で自信喪失。 授業への参加が出来ず、周りとの技術差が生まれることで登校意欲が下がる。 パニック障害や無気力で登校したいが家から出れない。 不眠症で睡眠薬を服用している生徒が5~10人程度いる。 統合失調症の生徒やADHDや自閉症の生徒の対応も難しい。(その他、8)

大カテゴリー	中カテゴリー	少カテゴリー	代表的なエピソード
当事者	当事者との関わり (27)	当事者の学びのレディネスの未形成 (7)	<ul style="list-style-type: none"> ・単位取得のために学校へ来ることを促さなければならない。 ・欠席によって単位を落としてしまうので復帰が難しい状況になっていく。 ・学校に通う生活習慣に慣れることができない（朝早く起きることができない、集団生活をするのができない等）。 ・高校までの学校生活の中でも不登校であった経験のある生徒が多く、せっかく専門学校に入学したにも関わらず過去の経験と重ねてすぐに諦めてしまう生徒が多いため早期退学となる場合が多い。 ・一人暮らしで親の目が届かなく、又、昼夜逆転の生活などで登校困難な学生。 ・通信制高校出身者の登校リズムが出来ていないこと。（その他、1）
	当事者の親との関わり (9)		<ul style="list-style-type: none"> ・親も「もう大人なので子供に任せている」と言って干渉してこないこともある。 ・保護者の方も高校までと同じ感覚で学校生活を過ごせるためのサポートを求めてくるが、同時に就職も求めてくる。厳しい話ができない子に就職のサポートは難しい。だがそこをなかなかご理解いただけない。 ・本人（卒業したい）と保護者（就職させたい）のゴールが異なる場合の指導の難しさ。 ・家庭の問題にまで教員が踏み込むことは違うと考えるが、親子との関係がうまくいかないと引きこもりも解消されないのではないかとジレンマがある。 ・保護者も精神的に参っている場合の対処方法。 ・親の心配が過度になり、子供自身も不登校に甘えてしまい中々抜け出せない状況下にあると、意見が通りづらく感じる。（その他、3）
専門学校	非義務教育 (6)		<ul style="list-style-type: none"> ・義務教育ではない上に、専門的な学習をする場であるため、通う意義を感じなくなってしまっている生徒に登校を続けさせることが難しい。 ・専門学校は学校生活を送ることが目的ではなく、社会に出すべき学校だが、やっていることは学校に出てくることで、学校が果たすべき役割が何か分からなくなる。（その他、4）
	授業の特性 (10)		<ul style="list-style-type: none"> ・グループで実習する事が多い為、集団生活が苦手な子は実習がとても苦痛。 ・実習中、貧血等で倒れる傾向があるような気がする。 ・実習が進んでいくので休んでしまうと基礎等が学べなくなる。 ・実習での集団作業に苦手意識の学生が多く、実習がきっかけで不登校の引き金になってしまうこともある。 ・自傷行為をしてしまう学生がいる中で、包丁を使用する授業は怖い。 ・「一人でスイーツや料理に取り組める」と思って入学するものの、実習ではクラスメイトとの共同作業がほとんどのため、コミュニケーションが図れないと、どんどん取り残されてしまう。（その他、4）

大カテゴリー	中カテゴリー	少カテゴリー	代表的なエピソード
専門学校	資格取得 及び就職 (16)		<ul style="list-style-type: none"> ・職業に直結した専門分野の授業しかないため、少し休むとついてこれなくなってしまうたり、クラスメートとの温度差ができる。 ・社会人育成の場ということを入学当初から伝えていますが、それ以前の指導が必要で時間を取られてしまう。 ・専門的な学びの場だからこそ、1日でもお休みをしてしまうと、授業についていけなくなってしまうため、学力面でのサポートが難しい。 ・本来の目的（資格を取得させ卒業させる）を達成できない。 ・長期欠席による単位取得および実習、就職活動。 ・国家資格が取れなくなってしまうので、来させたい。 ・目先の卒業ということをゴールにするならば、なんとしても学校へ来させる指導が必要であるが、その先の就職まで視野に入れるとなるとこちらからの関わり方も慎重にならざるを得ない。 ・手をかけて卒業だけさせても、社会ではやっていけないことが多い。 ・技術の授業についていけず、更に欠席が増える。技術のフォローが仕切れない。就職がしづらい。 ・業界への目標喪失。(その他、6)
	他の生徒との 兼ね合い (3)		<ul style="list-style-type: none"> ・クラス一律で指導したい事（毎日学校に来るなど）を伝えた際にプレッシャーになってしまい、フォローに多くの時間を要する。 ・意識が高い生徒への指導が後手に回ってしまう。 ・たとえ来させることが出来ても卒業までの間、他生徒の関係性や影響を考えてしまう。
教職員	多忙さ (3)		<ul style="list-style-type: none"> ・他の業務とのバランス。 ・平日に外出や公休の場合も多く、たまたま生徒が来た時があったとしても、担当が不在で対応できないことがある。
	分からなさ (26)	距離感 (10)	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒との関わる距離感。どこまで関与していいか。 ・来させるアプローチが「追い詰めることに繋がってしまうのでは？」という怖さがあります。 ・悩みを相談できるまでの信頼関係を構築するのが困難ではないかと思っております。 ・学生はどのようなことを求めているのか。承認欲求なのか厳しい意見も伝えた方がよいのか等。 ・どのように段階を踏んで参加させればいいのか、どのように周りもコミュニケーションをとっていけばいいのか難しさを感じています。 ・目標喪失が原因の生徒に対して、卒業までの過程をどのように歩ませたらよいのか迷うことが多い。 ・働いていく上での厳しさも伝えたいが、それが原因で不登校に繋がってしまう可能性があり、伝えたい事を伝えきれない現状があります。(その他、3)

大カテゴリー	中カテゴリー	少カテゴリー	代表的なエピソード
教職員	分からなさ (26)	知識・スキル (16)	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで引きこもりの生徒と関わったことがないのでなんとも言えない。 ・接し方がわからない。 ・専門的知識はないため、どの対応が正解なのか自信がない。 ・学校に来れない理由によっては、強く促すことが出来ないため、適切な対応が何かの判断に迷ってしまう。 ・ほとんどのメンバーは精神的疾患についても学んでいるわけではないため、生徒の状況を理解してもらうことも難しく感じます。特に現場上がりの先生方は、とても厳しい方もいるため、精神的疾患の生徒は「甘え」「怠惰」とみなされる場合もあります。 ・退学者を出さないために、クラスになじませる方法。 ・対人恐怖症の生徒に対しての接し方が難しいです。 ・体調不良や身体的、精神的な問題等で実習授業に参加できない場合の対応方法や周囲の生徒との関わり方で悩んでしまうことがある。 ・精神的・心理的に中学頃から不登校傾向な学生に対してのアプローチ。(その他、7)

3. 考察

本研究の結果は、ひきこもり・不登校の生徒に関する専門学校の教職員の評価（認知）に基づくことに留意した。そして、11の質問項目を「1. ひきこもり・不登校の生徒の属性等」、「2. 専門学校教職員のひきこもり・不登校の生徒への考え方や対応等」、「3. 専門学校特有の教職員の困っていること」に分けて、それぞれの結果ごとに考察をする。

(1) 専門学校のひきこもり・不登校の生徒の属性等

本研究では、専門学校のみきこもり・不登校の生徒の出身校は、「通信制高校」が7割以上、「全日制高校（普通科）」は約3割程度であった。通信制高校の在籍生徒の約6割が小・中学校及び前籍校（全日制高校等）における不登校経験がある生徒であることを鑑みると（文部科学省、2020a）、専門学校のみきこもり・不登校の生徒は小・中学・高校で不登校の経験があると推測できる。実際、本研究においても、専門学校入学前におけるひきこもり・不登校経験については、「多い」と「どち

らとも言えない」を合わせると約6割半に及んだ。しかし、「少ない」も約3割あり、専門学校進学後にひきこもり・不登校になる生徒もいると考えられる。

専門学校のひきこもり・不登校の主な理由は、「友人関係」が約8割に及び、続いて「精神障害や精神疾患」（76.69%）、「いじめ」（56.39%）、「家族関係」（53.38%）であった。対人関係の困難はひきこもり・不登校の要因として挙げられることが多く、例えば、伊藤他（2013）が不登校経験のある通信制高校の生徒2,617名を対象にした調査の結果においても、「不登校のきっかけ」として「友人関係」が53.5%であった。2,424名の通信制高校の生徒を対象とした藤後・小林・竹橋・藤本・平部（2021）によると、中学時代に不登校経験だった者が1,059名（43.7%）、いじめ被害を受けた者が325名（13.4%）、心の病気を有していた者が421名（13.4%）であった。

さらに、いじめ被害経験の有無により通信制高校通学時の幸福度を比較した結果、いじめ被害経験無群は幸福度が有意に高かった。このように対人関係の困難さは、中学時代から続いている場合があり、特に背景に精神障害や精神疾患、いじめ

等がある場合、教職員は対応に難儀すると考えられる。他方、本研究では「アルバイト」も約1割あり、ひきこもりを伴わない不登校のみの生徒もいることが窺えた。これらの結果を鑑みると、専門学校の生徒のうち全日制高校出身者よりも、通信制高校出身者のほうが学校への適応が悪い（内田・片山・都島・尾川、2018）との指摘は重要である。

本研究では、専門学校のひきこもり・不登校の生徒の親の特徴については、「放っておく」が最も多く、続いて「過度に干渉する」、「叱咤激励する」であった。その他は、「本人の意向を優先する」、「親も精神的に不安定」等が挙げられた。斎藤（1998）のひきこもりの家族のコミュニケーションの忌避事項である「放置」、「叱咤激励」、「原因追及」の指摘がひきこもり・不登校の支援者には浸透したが、この知識は専門学校の教職員にも必要と考えられる。但し、専門学校の生徒は高校卒業時よりも年齢が高いため、教職員も親も「どこまで子ども（大人）扱いするか」という線引きの葛藤があるのではないだろうか。

(2) ひきこもり・不登校の生徒への対応等

専門学校の教職員はひきこもり・不登校の生徒に対して、「登校復帰させるような働きかけをしたい」、「専門家と連携して解決を図りたい」と考えていることが分かった。その一方で、ひきこもり・不登校の生徒への対応に関する自信は、約7割が「あまりない」または「まったくない」と回答していた。尚、対応への自信と、「勤務年数」及び「ひきこもり・不登校の生徒でかかわった人数」に統計的な関連はみられなかった。教職員としてベテランであっても、過去にひきこもり・不登校の生徒への対応をしたことがあっても、自信を持ってないのだろう。

教職員の自信のなさの第一の要因は、ひきこもり・不登校の生徒の属性の「精神障害や精神疾患」への対応の難しさであると考えられる。第二の要因として、「いじめ」や「家族関係」がひきこもり・不登校の背景にある場合、教職員としてどのよう

に接してよいのか分からないということが窺える。しかしながら、こうした生徒に対応する意欲は高いため、教職員に対して適切な知識とスキルを提供すること、あるいはスクールカウンセラー等の専門家による働きかけが重要である。

ひきこもり・不登校の支援の難しさとして「当事者（本人）に会えない」というものがあるが、本研究でも教職員の6割以上が「本人に会えない」、「退学してしまう」と回答している。本人不在の中でどのように対応をすれば良いのかという教職員の苦悩が浮かび上がる。その他の回答として「対応のフローチャートがない」という記述があり、専門学校の教職員が関わるひきこもり・不登校の生徒への対応のガイドライン等が整備されることが望まれる。

専門学校の教職員が、不登校・ひきこもりの生徒への対応で効果があると考えているものは「生徒の親との話し合い」、「当事者の生徒との話し合い」、「級友からの働きかけ」であった。ひきこもり・不登校の支援の特徴である本人不在にあって、親と話し合いをしたり、本人と話し合うことを達成した教職員もいた。また、注目すべき回答は「級友からの働きかけ」である。ひきこもり・不登校の原因として「友人関係」があるのだから、友人関係を育み、対人的な居場所を作る方策は有効であろう。

教職員の連携先は「管理職」が最も多く、続いて「公認心理師や臨床心理士」であった。少数ながら「社会福祉士・精神保健福祉士」、「民生委員」、「病院」との連携も注目に値する。管理職との連携は必然であるが、心理学や福祉学や医学等の専門家との連携は今後より求められるため、専門家はそのニーズに応える必要があろう。「保健所・保健センター」、「福祉施設」に当てはまると回答した教職員はおらず、専門学校は大学・短大と同様に広範囲から生徒が通学するため、地域密着型の支援に対する連携には教職員の手が及ばないと考えられる。また、「連携していない」という回答も約1割あった。これが、教職員の孤軍奮闘によるもの

であれ、「教職員は何もしてあげられない」(4.51%)によるものであれ、教職員にも生徒にも益はないであろう。

教職員がひきこもり・不登校の支援に関して身につけたい知識は、「臨床心理学等の心理学」や「精神医学等の医学」が約7割であった。第一に、これらの知識(とスキル)を提供する研修会等の場が必要であろう。第二に、小・中学・高校・短大・大学で配置が進んでいるスクールカウンセラーが、専門学校においてもより必要であろう。

(3) 専門学校特有の教職員の困っていること

ひきこもり・不登校の生徒について、専門学校だからこそその教職員の困っていることを自由回答形式で記述してもらった。その記述をKJ法により分析したところ、大カテゴリーとして【当事者】、【専門学校】、【教職員】が析出された。教職員の困り感には、当事者の特性、専門学校の特性、専門学校の教職員の特性が大きく関与していることが分かる。

まず、【当事者】であるが、教職員は、ひきこもり・不登校の当事者(生徒)とその親への対応で困っていることが分かった。ひきこもり・不登校の中には「強制されたくない」や「集団行動をしたくない」という持論を曲げない者もあり、そうした生徒との関わりに教職員が困っていることが窺える。そして、うつ病や統合失調長等、体調不良や精神的な問題を抱えている生徒も多く、その心身の特性から集団行動が不得意であること等が現れ、ひきこもり・不登校となる生徒もいるであろう。また、専門学校のひきこもり・不登校の生徒が、小・中学校・前籍校で不登校状態にあったのだとすると、「朝起き、特定の時間に登校し、課題をこなす」という基本的な学びのレディネスが形成されていない者も多くいると推測される。専門学校は専門的知識とスキルを学ぶ場である。内田・片山・都島・尾川(2018)が専門学校の新生生に行った調査の結果では、「授業をサボってしまうことがあった」という質問に対し、全日制高校出身者の83.2%が

「あてはまらない」と回答したのに対し、定時制・通信制高校出身者は5割近くが「あてはまる」と回答していた。専門性以前の出席という基本的な学びのレディネスが形成されていない生徒への指導は、困難を極めるだろう。

続いて、【専門学校】であるが、教職員は、ひきこもり・不登校の生徒が専門学校の学びの特色についていけなくなることに困っていることが分かった。専門学校は、専門的な知識と技能を比較的短時間で習得しなければならない。特に技能の習得には実習という形態の授業への出席は不可欠である。義務教育ではない専門学校の教職員が、どこまでひきこもり・不登校の生徒の出席について対応ができるであろうか。専門学校は学びの専門性が高いが故に、教育の目標は必然的に資格取得と就職となる。そうした状況の中で、教職員が教育目標達成のための役割に加えて他の生徒との兼ね合いも配慮しながら、個別にひきこもり・不登校の生徒の対応をしていると考えられる。

専門学校の入学を生徒も(親も)志した時点で、資格取得や就職を意識したことであろう。教職員と生徒の「高い志」を達成する方法はないであろうか。内田・片山・都島・尾川(2018)は、不登校経験のある専門学校不適応生徒について、“定時制・通信制高校の出身者は、専門的な「やりたいこと」の実現可能性を高めるための排他的な行動戦略として、もしくは、将来の仕事を遂行するための基本的な職業観やキャリア形成の軸を身に付けるための戦略として、専門学校への進学を積極的に行っている可能性”について言及している。今後の専門学校のひきこもり・不登校の生徒の支援に際して、こうした「手に職をつけたい」という生徒(と親)の思いが活用されるべきであろう。

最後に、【教職員】であるが、教職員は、本来の職務の遂行とひきこもり・不登校の生徒への対応の両立に困っていることが分かった。そもそも、学校の形態に関わらず、教職員は多忙である。ましてや専門学校のように、専門的な資格取得とそれを生かした就職を教育の目標とすれば、毎学期・

毎年度ごとの様々な手続きや、就職先との連携等、多くの業務が発生する。そうした中で、欠席に職職員としてどこまで関われるであろうか。また、専門家ではない教職員が、ひきこもり・不登校の生徒と信頼関係を築くことは難しい場合もある。信頼関係の構築も危うい中で、時に精神障害や精神疾患のある生徒、加えて家族問題を抱えた生徒と、どこまでの距離感で接して良いのか分からないのは当然のことである。

本研究の結果から、専門学校の教職員が、ひきこもり・不登校の生徒の対応に難儀していることが分かった。そもそも、専門学校の教育の目標を維持しながら、基本的な学びのレディネスが形成されていない生徒に対応することは難しい。しかし、長谷川（2017）は、特定の通信制高校において、生徒が自主的に学ぶための工夫に注目し、不登校・不適応傾向の生徒に対して学校側が「仕掛け（トリガ）」を駆使する必要があると論じている。また、森田（1991）は、ハーシによる社会的絆（ボンド）理論を援用し、不登校に対して、“生徒と学校社会をつなぎとめている要素に着目し、学校社会が子ども達を引きつけることによって彼らの登校を確保し、学校という社会の枠組みに彼らを取り込むことを可能にしている要素に着目すること”が必要だと論じている。これはもしや長谷川（2017）の言う、“仕掛け（トリガ）”なのだろう。専門学校が、現代の子ども・若者の特性を踏まえて、教育を提供する方法を再考する必要もあろう。

精神分析家の狩野（2000）は、ひきこもりという現象に対して一人ひとりの人間の持つ「内面性」を見つめることの重要性を説いている。ひきこもる若者への対応に際して、“誰もがヒトに触れられようとしない、ヒトと交流しない領域をもっている。そしてそれを失ってしまえばヒトとして存在し得ないようなきわめて個人的な領域を持っている。このように、私たちはきわめて逆説的な存在であるか”と指摘している。専門学校の教職員がひきこもり・不登校の生徒への対応で、登校、資格取得、就職

を目指しながら、当事者の“ヒトと交流しない領域”を守ることは難しい。この命題は教職員と親だけでは解決し得ないと考えられるので、臨床心理学や精神医学の専門家との連携は必須であろう。

我が国の不登校研究の先駆者である稲村（1994）は、その大著『不登校の研究』を次の言葉で締めくくっている。“不登校の問題は、子どもの心理学的健康と教育的発達への恐怖を示す、ドラマティックで、謎に満ちた、深刻な情緒的危機であるとみられ、予防対策の重要性が痛感される”。このように「予防」の重要性を説いている。「小・中学校不登校→（全日制高校中途退学→）通信制高校卒業→専門学校」というように進路の選択肢が増え、専門学校へのアクセスが良くなることは大切であろうが、それでも不登校・ひきこもりは当事者の年齢が上がるほど「こじれる」ということを支援者の多くは知っている。今回の研究結果からも、ひきこもり・不登校の生徒への専門学校の教職員の対応の困難さが明確になった。本研究の知見は、専門学校の今後のひきこもり・不登校の対応の予防の重要性も示すであろう。

4. 引用文献

- 長谷川 陽平（2017）. 通信制高校における生徒支援の在り方の検討——仕掛学の観点から 京都大学教育行財政論叢、14、55-65.
- 平部 正樹・藤後 悦子・藤城 有美子・北島 正人・藤本 昌樹・竹橋 洋毅（2021）. 私立広域通信制高校生徒の通信制高校選択に関わるストレス別に見た精神健康の関連要因 日本公衆衛生雑誌、68（6）、412-424.
- 稲村 博（1994）. 不登校の研究 新曜社
- 伊藤 美奈子・小澤 昌之・安田 崇子・星野 千恵子・福島 智美・近兼 路子・原 聡・鶴岡 舞（2013）. 不登校経験者の不登校をめぐる意識とその予後との関連——通信制高校に通う生徒を対象にした調査から——慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要、75、15-30.
- 狩野 力八郎（2000）. まえがき 狩野力八郎・近藤直司編 青年のひきこもり 心理社会的背景・病理・治療援助 岩崎学術出版会
- 川喜田 次郎（1970）. 続・発想法——KJ法の展開と応用 中公新書
- 近藤 博之・岩永 雅也（1985）. 専門学校進学の際の諸側面 麻生 誠（編） 専修学校制度の諸側面とその評価——

- 短期高等教育の社会的規定に関する調査研究 科学研究費補助金研究成果報告書
- 三菱総合研究所 (2012). 平成 23 年度「高校教育改革の推進に関する調査研究事業」定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究
 <https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/05/29/1321486_02.pdf> (2022 年 2 月 9 日)
- 宮西 照夫 (2011). 三 ひきこもりが生じた社会背景 ひきこもりと大学生 和歌山大学ひきこもり回復支援プログラムの実践 学苑社
- 文部科学省 (2005). 第 3 章 新時代における高等教育機関の在り方 中央教育審議会 我が国の高等教育の将来像 (答申)
 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335595.htm> (2021 年 11 月 20 日)
- 文部科学省 (2020a). 高等学校通信教育の現状について 初等中等教育局参事官 (高等学校担当)
 <https://www.mext.go.jp/content/20200115-mxt_koukou01-000004175_5.pdf> (2022 年 2 月 12 日)
- 文部科学省 (2020b). 令和 2 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要
 <https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou2-100002753_01.pdf> (2022 年 2 月 12 日)
- 文部科学省 (2021). 令和 3 年度学校基本研究 (確定値) の公表について
 <https://www.mext.go.jp/content/20211222-mxt_chou-sa01-000019664-1.pdf> (2022 年 2 月 12 日)
- 森田 洋司 (1991). 「不登校」現象の社会学 学文社
- 斎藤 環 (1998). 社会的ひきこもり 終わらない思春期 PHP 新書
- 田中 敦 (2012). メゾ・システムを基盤にした北海道ひきこもり生活支援アンケート調査と考察 北海道地域福祉研究、16、87-101.
- 藤後 悦子・小林 寛子・竹橋 洋毅・藤本 昌樹・平部 正樹 (2021). 通信制高校生の過去及び現在の学校関連ストレスが幸福感に与える影響：いじめ被害経験の有無に焦点を当てて 未来の保育と教育：東京未来大学保育・教職センター紀要、7、33-41.
- 内田 康弘・片山 悠樹・都島 梨紗・尾川 満宏 (2018). 専門学校への進学と将来展望——専門学校から職業への移行研究の基礎分析—— 教職キャリアセンター紀要、3、19-28.
- (すだ まこと) 東京未来大学
 (のなか しゅんすけ) 東京未来大学
 (とうご えつこ) 東京未来大学